

【実践報告4】

「トリケラトプス ～ジュラシック・ハルキ～」

春木保育園 4歳児クラス担任 市原友香

1. はじめに

今年度も当初から昨年度に続き新型コロナウイルス感染症の拡大防止策を講じた対応の下で、スタート。今夏こそは…と思っていた大プール開設もこれにより控えることになったが、子どもの姿やつぶやきをきっかけに、園全体で「恐竜」をテーマに遊びを展開し、活動することが決まった。

クラス毎に遊びのねらいを立案し、約2ヶ月間という夏の遊びの計画を立て、実践を図っていく。プール活動が出来ないことに戸惑いもあったが、同時に子どもたちの思いからはじまる「恐竜」をテーマにした遊びに取り組むことにワクワクしている自分がいたのである。

2. 「恐竜」を通して生まれたぞうぐみの子どもたちの姿と遊びの方法

(1) 恐竜って不思議

7月、水を使って砂場で遊んでいる時の事…「卵だよ」と手に乗せて見せる子どもの姿があった。「何の卵かな？もしかして恐竜じゃない？」保育士の言葉に目を輝かせる。その後、黙々と恐竜の卵を次々砂場に作っていった。恐竜好きの子どもたちが「恐竜ってな、こうやって歩くんで」「喧嘩するんで」等、自らが持つ恐竜のイメージを語りだすと、恐竜をあまり知らない子どもたちも「恐竜って何色なん？」「草食べるん？」と次第に恐竜への興味が少しずつ膨らみ、その不思議さや面白さに気付き始めていく。



また、恐竜の絵を描いたり廃材を使って恐竜を作ったりする中、「背中どうなっちゃうの？図鑑見てくる！」と恐竜図鑑を調べ、知識を深める。保育士や友だちと話しながらか粘土で作った恐竜には歯や爪がつけられていたり、色を塗っていくことで、ジオラマが完成していったりと、どんどん恐竜の棲む世界は広がっていった。

(2) ぞうぐみに恐竜がきたら？

「恐竜が保育園に来たらどうなるかな？」「食べられるんやない？」「背中に乗って遊びたい！」「みんなで大い恐竜作る？」「いいね！」と口々にしながら、小さい恐竜の次は大きい恐竜へと製作の意欲を高める子どもたち。普段から廃材を使って自由に製作している経験が活かされ「どうやってつくろうか？」という保育士の問いかけに「牛乳パックをテープで繋げるとか？」「箱をくっつける！」と答えていた。実際の準備では箱だけではなく段ボールやペットボトル、新聞紙も用意した。始めはどこから手を付けていいか分からず戸惑いを見せていたが「体はどの箱を使う？」「顔はどっち向きにしようか？」と問いかけると、幾つかの廃材を使って組み合わせる子、布テープを手でちぎる子、それを貼っていく子、牛乳パックを繋げ尻尾を作る子の姿が見られた。

様々な種類の恐竜がいる中で、ぞうぐみの子どもたちの心を射止めたのは「トリケラトプス」。子どもたちに「トリケラトプスって一体どんな恐竜なの？先生に教えて。」と問うと、口で説明したり

図鑑を持ってきたりする。その図鑑を見ながら、顔の周りにペットボトルで襟飾りをつけ始めると、あっという間に骨組みが完成し、その後は数日間かけて、新聞紙で肉付けを行った。色付けは、トリケラトプスに「洋服を作り、着せる」というイメージで、まず模造紙にみんなで色を塗った。「何色にする？」と聞いてみると「赤」「緑」「青」と3つの色が出てきた。単色にこだわらず、「全部の色を使う」と最終的に子どもたちが決め、洋服作りが始まる。大きいトリケラトプスに対し模造紙を何枚塗ったら足りるのか保育士は考えていたが、その間に子どもたちは次々と塗っていき、想定していた以上のスケールで、その洋服の土台が出来上がった。「乾いたら着せてあげようね」という保育士の声かけに「寒そうやけん早く着せてあげたい」「夕方には続きができるかな？」と期待いっぱいの姿が見られた。

乾いた洋服の土台の紙を自分たちで適当な大きさに千切り、水で溶かした糊で、トリケラトプスに貼っていく。刷毛を使って、まずは保育士がやって見せていると、次第に「私(糊)を塗ります！」「こっちも貼って～」「僕もやりたい」「かわって」と友だち同士で声をかけ合い、その洋服は、子どもたちの手により、トリケラトプスの体に着々とまとわれていった。

トリケラトプスが完成すると足の間をくぐったり草を食べさせたりして活動が更に広がる。「ぞうぐみを作ったんだよ！」「ここは、わたしがしたんや」「〇〇ちゃんとしたんで」等、子どもたちの心の中は“自分たちで作った”“友だちと一緒に”という思いがきちんと込められているのだなと実感した瞬間だった。



(3) 「恐竜の森」ツアー

9月上旬、保育園全体で「恐竜の森」ツアーを計画した。ぞうぐみは「恐竜の森」のスタッフとして役割を各々担って参加することになった。子どもたちに話をした際、「やりたいー！」「ちょっと恥ずかしいな～」「マイク使って言うん？」等と様々な反応を見せていたが、どの子もキラキラとした目で期待感が感じられた。どんな風に説明するかや作品の配置を子どもたちが決め、ワクワクしながら当日まで準備を行っていった。当日になり、スタッフとして体操服を着用し、スタッフシールを身に付け、友だち同士で「えいえい、おー！」というハツラツな掛け声が聞こえてくる。いざ他クラスの子どもたちが来ると始めは戸惑いも見られたが、すぐに慣れ、案内したり、恐竜の説明をしたりする姿が見られた。他クラスの子どもたちがジオラマで遊んだり、トリケラトプスの足の間をくぐったりする姿に気づくと自ら寄り添い、優しく声をかけてスタッフとして主体的に動く姿が見られた。「恐竜の森」閉館時には、感想と笑顔が溢れ、「ひよこぐみさんのお世話した！可愛かった～」「〇〇ちゃんがトリケラトプスにびっくりしちよった！」「〇〇先生がすごいって言ってたよ」などの言葉と姿に充実感が溢れていた。



3. この活動後、活かされた遊びの環境等

(1) 運動会

運動会シーズンになっても恐竜ブームは落ちることはなかったので、当日、入場門やプログラムの中に恐竜の存在を際立たせていく。2歳児クラスのブラキオサウルス、3歳児クラスのステゴサウルス（きりんザウルス）、そして我がクラス4歳児のトリケラトプスが園庭を彩る。プログラムのトップは、全園児で踊る恐竜音頭。子どもたちの動きや仕草は、恐竜そのもので、なりきって踊る姿に、観覧している保護者の方も笑みがこぼれる。この恐竜音頭によって一体感が生まれ、威勢の良い幕開けとなった。

(2) アフリカンサファリ体験遠足

恐竜への興味と知識がアフリカンサファリ体験遠足でも生かされていく。サイに会い「トリケラトプスに似ちゃん」という子どももいれば、カンガルーを見て「ティラノサウルスみたいや」という子どももいた。「恐竜」と「動物」その近い存在に、園に戻っても興奮は治まらず、保育士が毛の色が変わるブラックバックを話題に出すと「ステゴサウルスも色変わるよな!」と、またもや恐竜と結びつくA児。それに続いて「寒くなったら恐竜も毛の色が変わるんじゃない?」という声が聞こえてきた。そこから、ぞうぐみのトリケラトプスも季節に合わせ、毛の色を変えてみることにした。「秋だから赤がいい」「オレンジもあつたかそう」等と、話し合いながら色を決め、あっという間に、秋から冬を迎える「衣替え」という活動に触れていけたのである。



(3) 秋の自然物遊び

毎秋、南立石公園で秋の探索活動をする。様々な秋の自然物を園に持ち帰り、遊びを広げていく。ぞう組は、アフリカンサファリの経験から、動物ゾーンを再現していく。餌やりのハサミを広告紙で作り、トリケラトプスにどんぐりや松ぼっくりを食べさせる姿、更に衣替えをしたトリケラトプスに寒くないようにと葉っぱを着せていく姿が見られた。

「安心して冬が迎えられるね」と恐竜を想う、子どもたちの優しい一面も見られた。



4. おわりに

今年度も、コロナ禍ということで、今まで普通に出来ていたことが出来なくなった活動もあったが、今、子どもたちに何をしてあげられるかを考える事の大切さを実感した。

今回のような遊びを、園全体で計画し、展開していったのは、子どもたちにとっても、私自身にとっても良い経験となった。

「恐竜」という一つのテーマのもと、夏から秋にかけて様々な遊びをする中で、友だちと関わり、協力し合い達成された喜びが、運動会や発表会へ繋がったと感じている。

今まで通りにはできない今だからこそ、新たな遊びを楽しめるよう、常に子どもたちにヒントをもらいながら、今後も充実した保育が出来るように努めていきたい。